安全で安心して生活できる社会の実現を目指して
コミュニケーション力を基盤として

総合的学習の時間　担当　中西　遼・和田　雅博

１．主題設定の理由

昨年度の研究授業のアンケートにおいて、高校生が中学生に向けて行った評価から、相手の立場に立ってコミュニケーションをはかろうとしていたことが評価されていたと考えられる。人間は社会的動物である。というのはアリストテレスの言葉であるが、社会性は人間として生まれた時から、徐々に他者との関わりの中で身につけていくものである。これには、発達段階に応じて伸ばしていくことが必要である。小学校においては、自分と友達・先生との関わりの中で、中学校においては自分と自分の属するコミュニティー、社会の中で、そして高等学校では自分と世界のつながりの中で社会性を身につけるとともに、思考力、判断力、表現力等を含めた自分自身の力を伸ばしていくことが大切だと考えられる。

これはまさに池田地区附属学校研究会において行っている「総合的学習の時間」の内容と一致するものである。また、今回の学習指導要領の改定により求められている「国語科以外の教科においての言語活動の充実」の実践にもあたるものである。

新学習指導要領（小学校 2011 年全面実施・中学校 2012 年全面実施・高等学校 2013 年 1 年生全面実施）の目指すものは「生きる力をはぐくむこと」である。これについては、第 1 章総則において「各学校において、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で，基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくむとともに，主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」と書かれている。

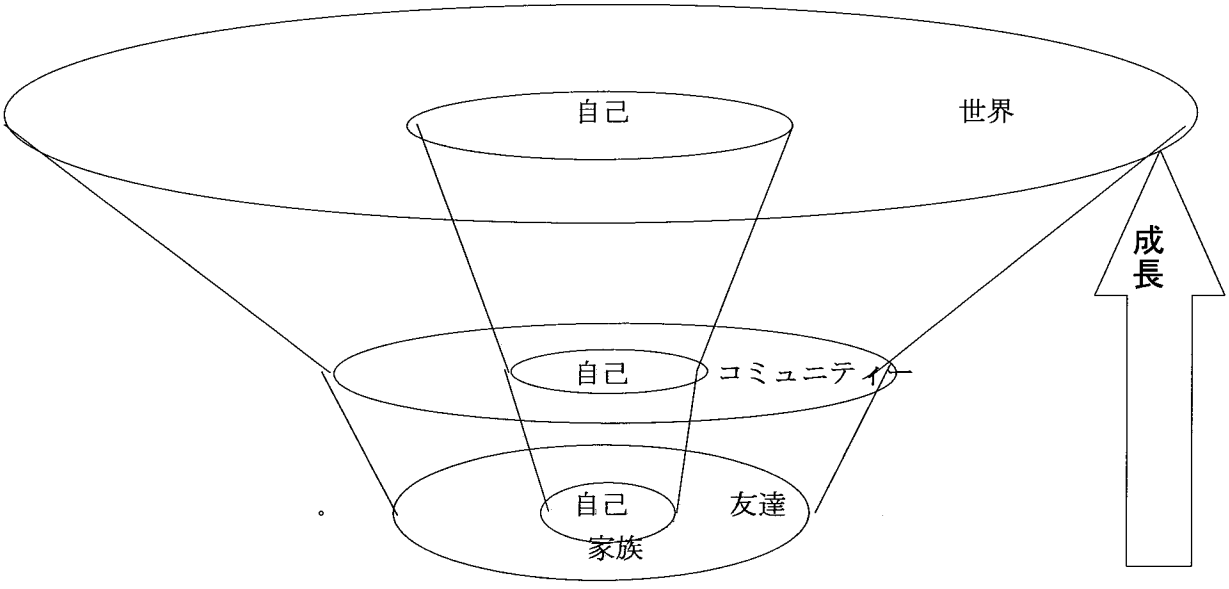
特に「総合的学習の時間」は専門性のある教科以上に小中高の学習内容の系統性を強く意識する必要がある。学習指導要領の「総合的学習の時間」の目標においては「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て」ることが求められている。小中高の密接な連携が必要であり、そうすることによってその効果はより大きなものになるはずである。

以上の理由により共同研究３年目の今年度、「総合的学習の時間」の小学校・中学校・高等学校の共同研究テーマとして、昨年度に引き続き、小中高の１２年間を見通した、カリキュラムの具体的な構築を目指した取り組みを行う。

２．実践の概要

池田地区においては、小学校が教育課程特例校として「安全科」を設置し、WHO による International Safe School　の認証をうけている。また、中学校においては従来「市民科」等による市民性の教育を行ってきている。高等学校においては 2003 年度より UNESCO 協同学校（現　ユネスコスクール）として「総合的学習の時間」において１年生と２年生が ESD（持続発展学習）に取り組む授業を行っている。

昨年３月 11 日東日本大震災が起こり、いろいろな問題が目の前に表れた。これをうけて、昨年度池田地区では、小学校において 6 年間の安全科のカリキュラムの中から「命のバイスタンダー震災編」「阪神大震災に学ぶ」「緊急地震速報」の３本を公開授業とした。また、中学校において「避難所としての学校」「リスク・コミュニケーション」の２本を公開授業とした。高等学校においては、１年生の総合Ⅰ（1 単位）、２年生の総合Ⅱ（2 単位）の授業において、各々、10 人ほどの様々な教師が担当する形で、ESD（持続発展学習）の探求活動を行った。原子力発電所の問題に取り組んだ生徒、避難所の問題に取り組んだ生徒、緊急地震速報の問題に取り組んだ生徒、と多岐にわたる分野の中からこの社会が持続していくのを阻害しているものは何なのか、その解決にはどのようなことが必要な中を考える取り組みを行った。環境、科学、倫理、医療、震災、防災、貧困、格差社会など、様々なテーマについて探求活動を行った。その中から総合の授業としては「世界がもし 100 人の子どもの村だったら」という高校１年生がファシリテーターとして中学３年生のためのワークショップを行う授業を、高等学校の教員の指導により提案授業として行った。



【思考力・判断力・表現力等の育成の重視】

● 各教科等の指導の中で、観察・実験やレポートの作成など、知識・技能を活用する学習活動を充実

３．実践事例

総合的な学習の時間学習指導案

安全で安心して生活できる社会の実現を目指して

～震災発生からの 72 時間～

〈授業者〉中西 遼　　和田 雅博

（１）対　　象　第２学年Ｄ組、第１学年Ｄ組

（２）単元設定の理由

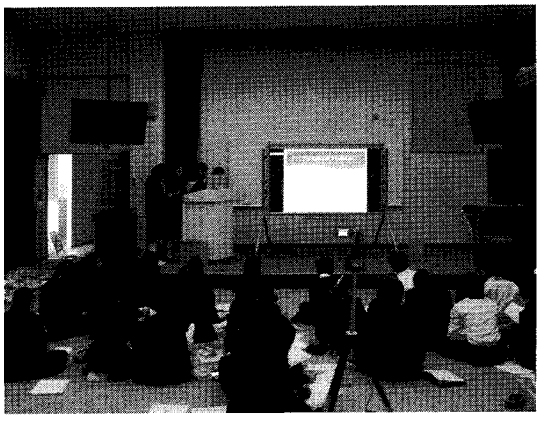
地震をはじめとしてあらゆる自然災害は予知することできない。しかし、地球温暖化による天候異変や東南海地震の危険が大きい。よって、予知に迫るための過程の研究・努力は欠かせない。しかし、現在のところ地震やその他の自然災害が発生した時にいかに被害を軽減させるかに精力を傾けることも重要である。

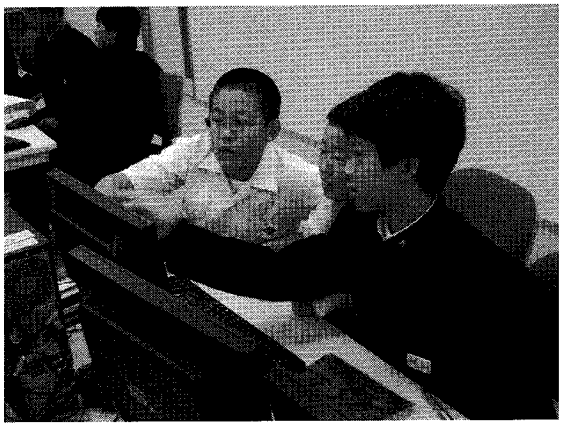
災害が起きたとき被災生活は、最低３日間支援が来ないことを前提に備え、乗り切る「準備」をもつ必要がある。そこで「災害発生から３日間」の生活をまもることを取り上げる。

この３日間は隣近所の要援護者の安否確認・安全な場所への避難誘導後のことである。よって、生活をまもる時間帯となる。私たちは、電気・ガス・水道といったライフラインに大きく依存しており、ライフラインがストップすると私たちの生活に大きな支障をもたらす。特に地震災害では、長期にわたりライフラインが寸断することが想定されている。行政などの支援に頼ることなく、最低３日間は各人が乗り越えられる備えと知恵を身につけておく必要がある。

また、災害が時として大きな被害をもたらすのは「想定もしない」「思いもしなかった」ことが起きるからである。想定されたことが起きるなら、それに対する準備もできるし、対策を講じることも可能だが、想定もしないことが起きて大きな被害が生ずる。

しかし、それまでまったく経験したことのない事態に備えるのは容易ではない。それではどうしたらよいのか。それには学習である。これまでの災害の記録により、どのようなことで被害が発生したかを学習しておくことが極めて有効である。過去の災害に関する資料、記録や今後起こりうる災害のシミュレーションなどから、「自助」「共助・協働」「科学」「情報」「救急」の視点で交流し、どのような準備が「災害発生からの３日間」に必要なのかを発信する。





（3）単元の目標

災害での問題解決場面において、リスクが存在する環境下であっても様々な課題を把握し、多様な視点を考慮しながら意思決定し、行動できる姿勢を養う。

（4）評価規準表

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
班内で協調しながら意見を出し合い、課題解決に向けて協力できている。	多様な視点を考慮し、自分自身の意思や行動に結びつけることができる。	課題を正確に把握し、その課題の解決に向けて追求することができる。	情報や課題を理解・分析し、根拠をもって考えをまとめている。

（5）指導計画　　安全で安心して生活できる社会の実現を目指して

『～震災発生からの 72 時間～』（全 5 時間）

第 1 次　「自助」「共助・協働」「科学」「情報」「救急」を学ぶ　1 時間

第 2 次　プレゼンテーション準備　2 時間

第 3 次　プレゼンテーション（本時）　1 時間

第 4 次　まとめ　1 時間

（6）言語活動のマトリクス

コミュニケーション／題材	言語的コミュニケーション			非言語的コミュニケーション
	読む	書く	話し合う	行動する
リスク・コミュニケーション	情報や課題を正しく把握する。	課題解決に向けて理由や根拠を明らかにしながらまとめる。	多様な視点を考慮し、よりよい解決策を話し合う。	日常または災害時に自らの考えで行動する。

（7）本時

（1）目標

（i）どのような対応が適切なのか根拠をもって考えようとする。（よりよく問題を解決する資質や能力）

（ii）課題を正確に把握し、自分のとる行動について理由や根拠をもってまとめることができる。（学び方やものの考え方）

（iii）他者と協力し、討議に参加することができる。（主体的・創造的・協同的に取り組む態度）

（2）展開

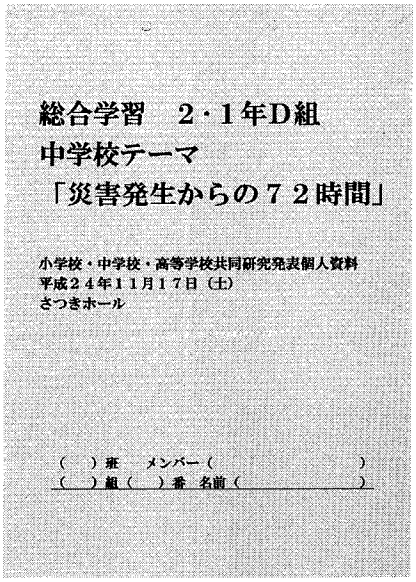
学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
導入	・前時の振り返り	・「自助」「共助・協働」「科学」「情報」「救急」の復習	
展開	・プレゼンテーション①②（1年生）		評価（ⅱ）
	・①②を聞いて「次の課題」を話し合う。 ・「次の課題」を提案する。	・発表内容を聞いて「今、解決できないこと」をワークシートに書かせる。 ・提示された課題に対し、自分の意思およびその根拠を考える。 ・共感できる意見を大切にさせる。	評価（ⅰ）（ⅲ）
	・プレゼンテーション③④（2年生）		評価（ⅱ）
	・③④を聞いて「次の課題」を話し合う。		評価（ⅰ）（ⅲ）
まとめ	・「次の課題」を提案する。 ・ワークシートに自分の意見を書く。		

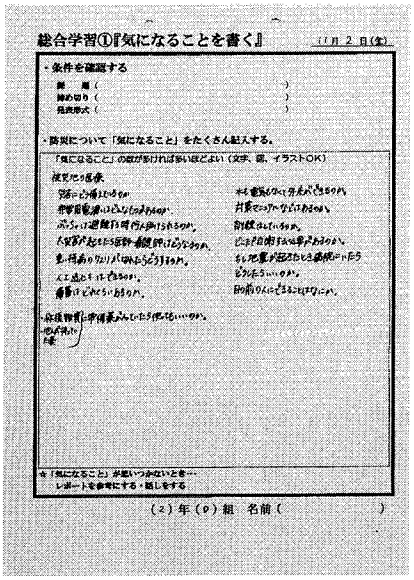
平成24年11月17日（土）　大阪教育大学附属池田地区附属学校研究大会
中学校　総合的な学習の時間　さつきホール２Ｆ　２年Ｄ組　１年Ｄ組
安全で安心して生活できる社会の実現を目指して
～震災発生からの72時間～プレゼンテーション提案者
①１年Ｄ組『地震のメカニズム』　②１年Ｄ組『避難所』　③２年Ｄ組『この学校が避難所になったら』　④２年Ｄ組『災害医療』

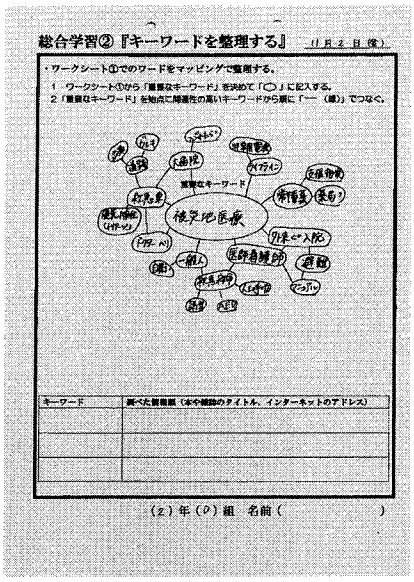
クラス内（事前）発表会

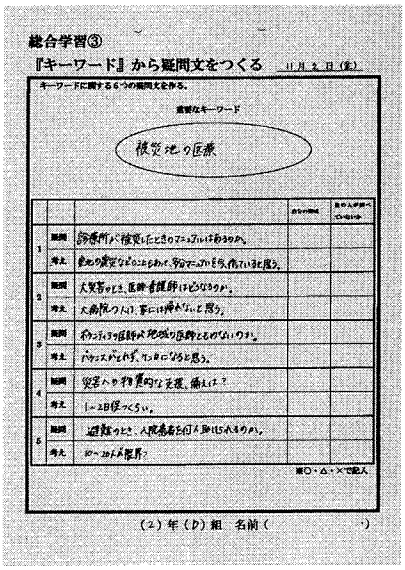
２年Ｄ組　研究テーマ
①『災害が起こった際の医療・対処法』
②『72時間』
③『対策・対応』
④『被害対策・仕組み』
⑤『直後の対応』
⑥『72時間～避難所～』
⑦『防災72時間』
⑧『災害医療』

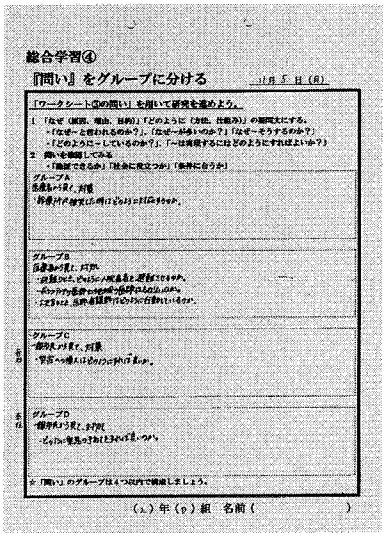
１年Ｄ組　研究テーマ
①『地震のメカニズム』②『減災について考える』
③『地震に連動して起きる災害』
④『地震、津波、避難対策』　⑤『自分を助けるために』
⑥『避難所』⑦『防災72時間』⑧『避難所での生活』
⑨『防災グッズ』　⑩『地震とその二次災害について』
⑪『少しでも多くの命を救うために私たちにできること』
⑫『火山について』　⑬『災害から72時間』
⑭N班『どう救う？大切な命を











本校の総合学習について

調べ学習や体験的な学習を通して、人・モノ・こと と出会い、それらと相互啓発を行う。その中で自らを見つめ、よりよい進路を切り開く力を養うとともに言語活動に重点を置き、表現力や問題解決能力など「他者と共に生きる力」の源となる能力を伸長していく。

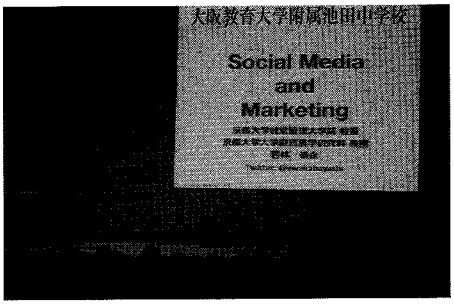
さらに、本校では体験から学習することを重視し知識として学ぶことに加え、実際に様々な人やモノ、コトとつながる授業が展開する。それは体験的に学習することで事物の本質を受け止めることができると考えているためである。そのため、1 年生の宿泊研修、2 年生の研修旅行、三附中交歓会、3 年の修学旅行、毎年 9 月に行っている「先輩の授業を受けよう」など学校で行われる行事にから専門的な話を聞いたり、学習活動の過程での疑問や課題を解く方法を自ら考えることの大切さを学んでいる。

入学後すぐに 1 年生には基礎技能の獲得をねらいとした授業を設置している。「1 電話や文書による依頼・挨拶・マナー」「2 フィールドワークの方法」「3 グラフ・統計処理」「4 インタビュー技術・アンケート調査方法＆作成」「5 プレゼンテーション技術」「6 新聞作成」「7 ポスター・パンフレットデザイン」

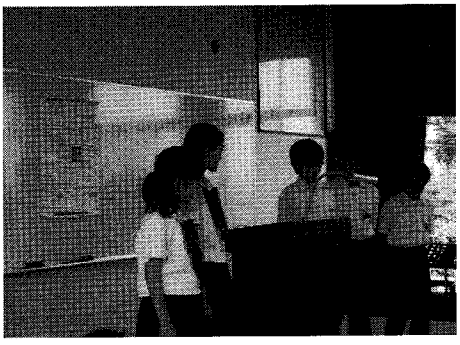
学年・組・班での活動を通してなかまのよさや大切さに気付き、団結力を高め、集団活動における規範意識の向上をはかっている。

総合学習週間（6 月 12 日～15 日）目標…普段の教科，道徳，総合学習では養えない基礎技能の習得，体験学習等を通して，相互啓発を行う。

1 年	「地域社会と自分」	基礎技能講座（宿泊研修）（大学訪問）
2 年	「国際社会と自分」	アジアの文化と日本の文化（京都研修）
3 年	「現実社会と自分」	社会参加実習



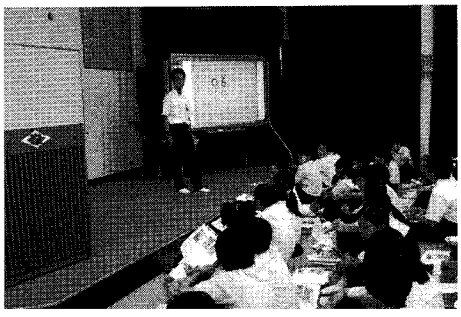
京都研修・京都大学での講義と留学生との交流（2 年生）



大学訪問で大学生にインタビュー（1 年生）　宿泊研修で「奈良」についての研究発表（1 年生）

※総合学習 6 月～10 月

1 年	「地域社会と自分」	わが町自慢
2 年	「国際社会と自分」	アジアの文化，日本の文化
3 年	「現実社会と自分」	進路学習
小中高共同研究 ……		安全，防災について

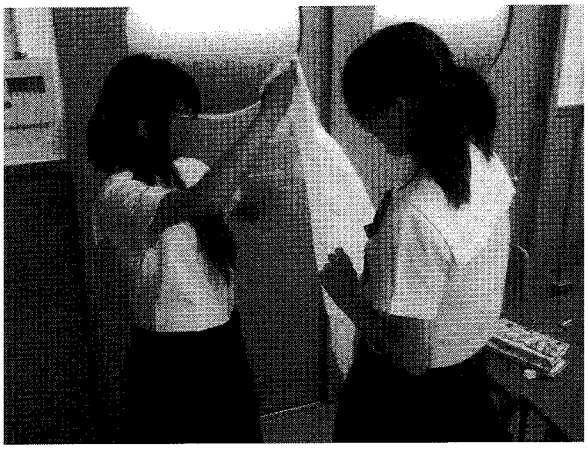


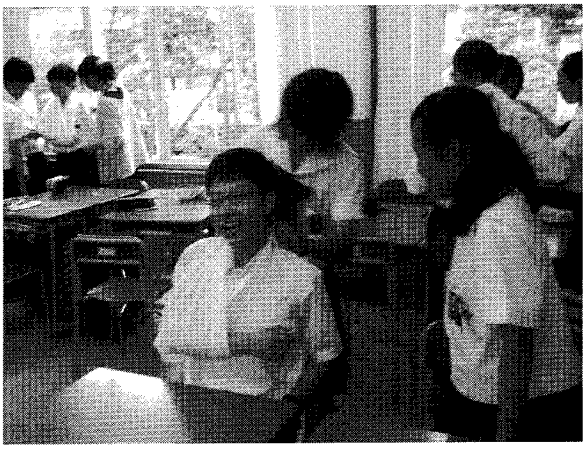
※人権総合学習（11 月～3 月）（詳細は道徳人権教育推進委員会より）
目標……社会に存する人権問題を知り，その理解を深めると共に，差別や人権侵害を見抜く力やそれに立ち向かう態度を育てる。

１年	「障害」者問題
２年	男女共同参画社会
３年	部落問題，在日問題，進路学習

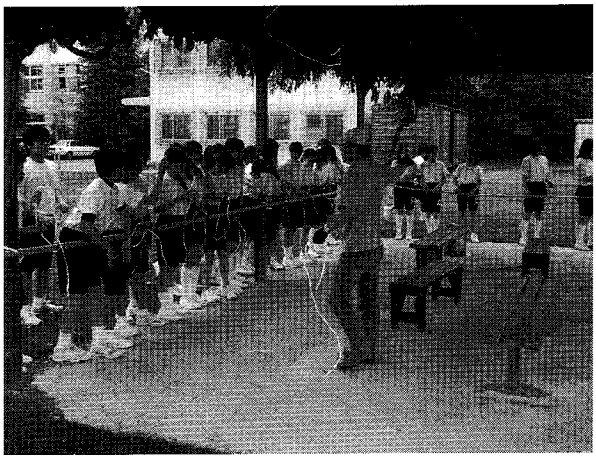
附中タイム

言語活動は知的活動の基盤であり、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもある。そうした言語活動の充実をはかるために、必修授業にプラスαとなるような様々な取り組みを行う。教科の枠を外し、幅広く学習することによってその充実をはかっている。





「自助」の活動として養護教諭から応急処置（三角巾の使い方）を学ぶ生徒たち



授業後の話し合いについての自己評価

	できた	少しできた	少しできなかった	できなかった
全員で納得できる話し合いができた	83%	17%	0%	0%
全員が次の課題を見つけることができた	38%	49%	3%	0%

授業内容の実践について（授業から半年後）

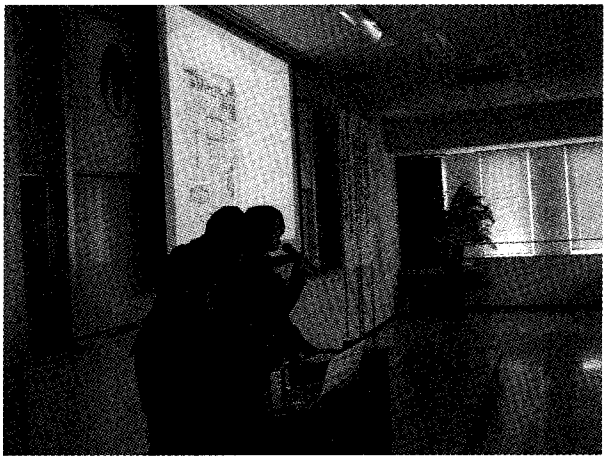
	十分に身についている	おおむね身についている	あまり身についていない
授業内容について	98%	2%	0%

〈具体的な例〉

・家族で話し合いをもった。　・懐中電灯を枕元に置いている　・避難経路を確認した。　・寝るとき
に靴を近くに置いている。　・災害が起こってからの家族の集合場所、時間を確認した。　・非常食を
すぐに出せる場所へ移動した。　・携帯電話に懐中電灯のアプリを入れた。　・防災グッズの点検を行
った。　・非常持ち出し袋を準備した。

・ペットボトルに水を溜めている。　・家具の転倒防止を付けた。

第三回アジア・太平洋学校安全推進フォーラムで発表する２年生



小中高・海外の先生方へのプレゼンテーション

４．成果と課題

・防災教育にはさまざまな「壁」が存在する。被災地から転入した生徒が在籍していたら、家庭と連携していくつもの配慮をしなければならない。「想定外」を想定する重要性から、堤防やハザードマップなどがまったく意味がないと考える生徒がいたら、それぞれの意味合いを問い直させたい。大災害だけに目を向ける生徒がいたら、死傷者が少なくても災害の恐ろしさと、そこから生まれた教訓があることにも着目させたい。いくつもの留意点があるが、それを壁として消極的になるのは間違いである。むしろ、いくつもの留意点があるからこそ教師は鍛えられるのである。

また、学習に取り組み災害対策改善に向けた提案をしても、次の課題がすぐに見つかってしまう。あらゆるケースに対応できる方法は見つけることが困難である。この学習を進めながら、私たちが常に抱えていた「問題」である。私たちの授業課題は追求することだと学びながら気付いた。防災・減災対策は終わりがなく完全の策はない。ただ、追求することによりその時点での最善が発見でき、そこから新しい次の課題が見つかり、それに取り組むことで防災意識が高まり、また一歩減災の前進となる。私たちは今回の提案を次年度に引き継ぎ研究を続ける覚悟である。